

各都市教頭会 研究報告 1

岐阜市小教頭会

来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり ～チーム学校を支える教頭の役割～

岐阜市小学校教頭会は、市内全48校52名の教頭で構成され、毎月定例で5つのブロック別研修会と4専門部会（研究・組織・広報・厚生）、年2回の小中合同ブロック別研修会を実施し、実践交流や講話等で教頭として資質向上に努めている。

テーマ具現に向けて、「働き方改革を踏まえた実践」や、「その子に合った教育を進めるためのユニバーサル的な実践」、また「危機管理面の意識を高めるための実践」や、「学校運営を活性化させるための教職員への指導」等の視点から、各校の取組状況や成果と課題等を交流した。

コロナ禍による研修回数や時間の縮小もあったが各校の感染症拡大防止の取組の工夫や、学校運営や行事に関わっての取組等も情報交流したことで、充実した研修となり、勤務校の教育活動の向上を図ることができた。

（則武小学校 北川 三千代）

羽島市教頭会

未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり

羽島市では、県教頭会研究課題を受け、市の方針における学校の課題解決のため、教頭としてどう関わるとよいかを明らかにすることを研究内容とした。特にコロナ禍であっても「子どもの学びを止めない」ために教頭としてできること、組織マネジメントについて研修・研究を行った。

＜不安を解消し未来へつなぐ組織マネジメント＞

- ・経験のないことへの不安について
- 組織として対応、運営できるよう組織を見直す。
- ・新たな活動、行事を創り出す際の視点について
- 必要なこと、大切にしたいことを整理する。
- 各学校の強み（学校規模、地域性等）を生かす。
- 児童生徒が中心となつて行える活動にする。

成果として、新しい形の運動会や水泳学習（校内のシステム化、外部委託）、児童生徒会活動、学校行事、小中一貫の取組等を実施することができた。今後、システムを残し、更に構築することが課題である。

（中島小学校 又賀 明彦）

岐阜市中教頭会

一人ひとりが価値ある大切な存在として互いに認め合うことのできる生徒の育成をめざして

岐阜市中学校教頭会では、市内25校30名の教頭が4つのグループの2部制で実践交流を行い、日々教頭としての資質向上に努めている。

今年度は東海北陸福井大会においての提言者として、研究理論の構築と実践の累積を行ってきた。「連携」をキーワードとし、小中一貫教育、PTA活動、コミュニティスクールの取組、岐阜大学の協力による「STAR」事業などを教頭としていかに充実させていくか協議した。

また、教育活動のスリム化、教職員の資質向上、危機管理についても、岐阜市内の実情をふまえて、どのように進めていくべきか、具体的な事例をもとにして互いに検討することができた。

研修事業としては、岐阜市教育長による講話、各校に配置されているスクールロイヤーの研修なども行い、勤務校における教育活動の向上につなげることができた。

（島中学校 石神 康晴）

各務原市教頭会

教職員の専門性を高め、魅力ある学校づくりを推進するための教頭の役割

各務原市の教職員の願いをもとに、効果的な研修体制づくりを通して教職員の専門性を高める取組を行った。

研修については、市のミドルリーダー及び若い世代を育てることをねらいとしたパワーアップ研修やトワイライト研修の受講を積極的に勧め、活用した。また、様々なニーズに応じて大学教授などを学校へ派遣する出前講座を積極的に活用した。さらに校内だけではなく、自校の教職員が希望をすれば、他校の全校研究会にも参加できるように連絡・調整を行った。

今後それぞれの学校や個人の課題に沿った研修にするためには、外部研修だけでなく校内研修の充実も重要である。教頭として、学校の現状の課題を的確につかみ、適時に効果的な研修を仕組んでいけるようさらに工夫改善していきたい。

（中央小学校 篠田 恒子）

各郡市教頭会 研究報告 2

山県市教頭会

組織を活かした学校運営

市内全 12 校各校の実態を踏まえ、これまで培ってきた「豊かな人間性と創造性を育み、未来を拓く学校教育」具現のための方策・実践をもとに、研修を行ってきた。

特に今年度は GIGA スクール構想に関わって、授業や家庭学習で使えるアプリの情報やタブレットの活用方法の情報交流を定期的に行った。また、市内の学校での新型コロナウイルスの初感染を受け、感染症拡大防止の取組の工夫や、感染時の対応の注意点などを交流した。さらに、働き方改革にも関わる校務支援システム導入について教頭会からも助言・支援を行った。

12 会員中 8 名が新会員という入れ替わりの多い年であったが、気軽に相談し合える雰囲気の中、各校の実践を高めることができた。

(大桑小学校 鷺見 博史)

本巣市教頭会

豊かな人間性と創造性を育み未来を拓く学校教育 ～コロナ禍における

安心・安全な学校づくりを目指して～

1 研究内容と成果

(1) 教育環境の整備

研究内容は、コロナ禍における子どもの立場から、保護者の立場から、教職員の立場からみた安心・安全環境づくりについてである。

(2) 成果

感染対策に有効な情報を共有し、物品購入をしたり、ICT 教育環境を整備しながら学校行事を保護者に配信したり、教職員の安全確保に努めた。

2 今後の課題

コロナ禍でも、安心・安全に配慮しながら、制限された中で最大限の教育効果を得るために情報交流をしながら、教頭として更に研究実践を深めたい。

(外山小学校 田口 めぐみ)

瑞穂市教頭会

校長の学校運営方針の具現を主体的・協働的に 図るための教職員への働きかけの在り方

感染症予防への配慮はもちろん SDG s の観点を加えつつ研究実践を試みた。キャリアステージや力量に応じて、期首面談などで付けたい力や動きを具体的に示し成果や伸びを伝える営みも継続した。

教職員の力量の向上を図ることが一番の労務管理につながる。若手教員の学習や生徒指導における指導力の向上を目指して、適切な時期に研修を仕組み、何を大切に取り組んでいくかを明確にした。また、ミドルリーダーと共に時間外勤務時間を減らすための工夫や声かけを行うことで、経営・分掌を推進する力の向上を図ることやモチベーションを上げることに努めた。組織的な動きの更なる活性化に向けた働きかけや研修の効果については今後も検討していく。

(牛牧小学校 原 祐子)

羽島郡教頭会

豊かな人間性と創造性をはぐくみ、 未来を拓く学校づくりの推進と教頭のあり方

羽島郡小中学校教頭会では、「組織を生かすための若手やミドルリーダーの育成」に重点を置いて研修を行ってきた。

今年度も、羽島郡二町教育委員会の指導を受けながら、「各学校での実践事例の提案に基づいた研修」「教頭としての資質向上を図るための講話」を中心に年 9 回の研修会を行った。また、ICT に関わる研修会に、教頭会も参加することで、ICT 推進担当教師と一緒に学ぶ機会をもつことができた。

来年度は、組織マネジメントをさらに充実させながら、各校の教職員の資質向上につながる様々な取組を交流し、より一層魅力的な学校づくりを進めていきたい。

(岐南中学校 佐野 光範)

各郡市教頭会 研究報告 3

本巣郡教頭会

新しい時代を切り開く資質・能力を
身に付けた、たくましい子どもの育成

昨年度から続くコロナ禍においては、臨時休校や学年閉鎖において「児童生徒の学びをどのように保障するか」が喫緊の課題となった。

北方町小・中教頭会は、非常変災時を含め、新しい時代を切り開く資質や能力として、タブレットの活用力を身に付けることが急務であるにとらえICT推進員などと共に以下の実践を行った。

- ・児童生徒の健康や集中力に配慮した双方向型のオンライン授業の工夫
- ・Zoomやロイロノート等の学校と家庭を繋ぐアプリの活用

実践を経て、教師や児童生徒がZoomやGoogle Classroom、ロイロノートなどのアプリを様々な場面で活用できるようになったことは成果と言える。

今後も小・中教頭会での情報共有や連携を密にして、実践研究を積み重ねていきたい。

(北方西小学校 広瀬 政至)

海津市教頭会

社会に開かれた教育課程の実現に向けて
～新型コロナウイルス感染拡大防止を基盤にして～

新型コロナウイルス感染拡大防止を基盤とし、児童生徒が主体的な学びをするため、家庭及び地域と連携し「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し取り組んだ。

研究の方法は、以下の2点である。

- ① SWOT分析による自校の外部環境と内部環境の利点の整理の上での研究実践
- ② 定例の市教頭会（校区ごとを含む）の実践交流と情報交流

感染症対策及びGIGAスクール構想など高い関心に対し、保護者・地域の方の来校機会も減り、連携協力を得るには、情報発信の工夫が必要である。社会に開かれた教育課程の実現では、全教職員の力が不可欠である。不均衡な職員構成をプラスにするために、教頭が見通しを示し、価値付け、やりがいを感じられるようにしていきたい。

(高須小学校 松家 隆弘)

大垣市教頭会

未来を生きる力を育む 魅力ある学校づくり
キーワード〈自立・協働・創造〉

令和2年度までの4年間、「教職員の専門性を高め、資質向上を図るための教頭の役割」を主題として、校種や学校規模、各校の実態など、自校の強みを生かす取組を実践交流し、大垣市としてまとめた。

本年度は、各校の実態に合わせた取組を展開し、大垣市として今後の重点を探る取組とした。そこで、全国共通研究課題を基に、各校の実態の合わせた取組について実践交流をした。

研究体制は、前年度までの成果を引き継ぎ、学校種、学校規模別による4班体制で実践交流を進めることとした。

また、教頭の資質向上のために、隔年で開催する研修会では、社会人落語家を講師に招き、落語を交えて身近な人権についての研修を行った。

今後は次年度に向けて重点を検討したい。

(静里小学校 多田 仁)

養老郡教頭会

一人一人が輝く教育の創造

～地域の教育力とICTの活用を通じた「多様な学び」、
教職員の資質向上、やりがいのある職場の推進～

昨年度に引き続き、コミュニティ・スクールを基盤とした地域の教育活動の推進、教職員の勤務の適性化と資質の向上の推進に加え、今年度はICTを積極的に活用した学習の充実を図ることに重点をおいて取り組んだ。

年間の研修計画を作成し、研修テーマに基づき、資料提案を行った。各校の実践交流を通して、それぞれの取組のよさや課題を知ったり、自校の実践に生かしたりすることができた。ICTの活用についてはGIGAスクール構想の推進を受け、タブレットを積極的に活用した学習の充実を図るために、全小中学校の活用例や使用状況等を常に情報交流することを大切にしたい。

今後も一人一人が輝く教育の創造の具現化をめざし、情報交流、各校の連携を大切にしていきたい。

(養老小学校 西脇 恵子)

各郡市教頭会 研究報告4

不破郡教頭会

豊かな人間性と創造性を育む学校をめざして
～教職員一人一人の
資質や能力を高めるための教頭のあり方～

児童生徒一人一人に「豊かな人間性」と「創造性」を育むには、教職員が確かな指導力を発揮することが必要である。そのためには、教職員一人一人が自分の指導を真摯に振り返り、自ら資質や能力を高めていく不断の営みが必要となる。その営みを適正に指導・支援していく責任を果たす必要があると考え、研究主題を設定した。

下記の3点について各校で実践に取り組み、発表・交流を行う。

- ①業務改善・働き方改革
- ②教職員の資質向上
- ③危機管理・防災

教頭同士の情報の共有、各校における実践や学校課題についての意見交流、今日的課題に関わる講話により、教頭として必要な資質・能力について見直す機会となった。（府中小学校 大矢 浩史）

揖斐郡教頭会

児童生徒の可能性を伸ばす
教職員の専門性を高める教頭の役割

GIGAスクール構想に基づいて、学習機器などの整備が進められ、児童生徒を取り巻く環境は刻々と変化している。一人一人の可能性を発揮し、生き抜く力を伸ばしていくためには、教師の専門性を高め、より質の高い教育を提供していくことが必要である。そのためにGIGAスクール構想の推進にあたって、教頭としての役割について実践した。

(1) 町内同一歩調で推進するための連絡調整

・タブレット配付、接続テスト、オンライン朝の会や学習を進めるにあたり、小学校間、小中間の連携を図って進めた。

(2) タブレット活用の職員研修

・タブレットの活用の仕方について、学び合う研修を位置付け、全職員が活用できるようにした。

今後も、教頭間で情報共有を大切にし、教頭がリーダーシップをとりマネジメントをして進めていく必要がある。

（八幡小学校 香田 みどり）

安八郡教頭会

誰もが自己肯定感をもち、
生き生きと生活できる学校を目指して
～組織の活性化を図る教頭の役割～

テーマに基づき、「組織を活性化するための校内体制の工夫」、「教職員一人一人の資質や専門性を高める研修の充実及び取組」という2つの視点から各校で実践を行い、実践交流を行った。特に、校内体制の工夫として、若手教員の育成や業務の適正化について、どの学校においても課題ととらえて取り組んでおり、他校の実践から大いに学び合うことができた。

緊急事態宣言が発令される中、オンラインでの教頭会を試み、実施した。また東海北陸大会にも全員で参加するなど、コロナ禍だからこそできたこともある。一方で、参集して直接話すことで、交流をより深めることができたことから、直接話すことの大切さも実感した。今後さらに、子どもたちのために本当に必要なことを見極め、教職員の資質向上と働き方改革の両立を目指していきたい。

（結小学校 大坪 由美）

関市教頭会

夢のある明るい学校づくりの推進
～子どもの発達に向き合う取組と教頭の役割～

発達に何らかの問題を抱え、学級に馴染めない児童生徒、不登校傾向の児童生徒の増加は、学校現場において喫緊の課題である。そこで教頭の役割を明確にし、「発達」という視点で子どもへの支援や指導を工夫することで「夢のある明るい学校づくり」を推進できると考え、本主題をもとに昨年度より実践を進めてきた。

- I 小中9年間の発達の段階にもとづき、切れ目なく支援することを目指して、発達に課題を抱える子どもへの支援、小中連携による生徒指導、発達の段階に応じた教科指導などの実践を交流した。
- II 「子どもの発達」に関わり、県立わかあゆ学園園長、中濃特別支援学校発達支援専門職を講師に招き、講演を2回実施した。
- III 職員構成表とSWOT分析による学校の外部・内部環境の把握をもとに、そのよさを生かしたり克服したりする取組を、各校で工夫し実践した。

（津保川中学校 丹羽 強）

各郡市教頭会 研究報告5

美濃市教頭会

美濃学を充実させるための教頭としての役割

美濃市教頭会では、子どもたちが美濃市に誇りをもち、美濃市を大切にできるようになるために、美濃学など地域との深い関わりのある学習を見直し、教頭として以下の3つの関わり方を探った。

- ・地域講師データの共有と活用の仕方
- ・講師と児童の対話を大切にする学びの工夫
- ・美濃学の情報発信の在り方

その結果、次の成果があった。

- ・美濃学では、学校と手すき和紙協同組合、各祭りの保存会、商工会議所、公民館、企業などの組織や地域の講師などをつなぐ役割を教頭が果たした。そして、地域の人の考えや願い、生き方を聞く機会を設定することで、ふるさとに誇りと愛着をもつ子どもが増えた。
- ・美濃学たよりを作成し市内全小中学校に配付したことで、多くの児童生徒が他校の地域の特色を知る機会となった。

(牧谷小学校 富村 竜也)

美濃加茂市教頭会

誰もが「学校が楽しい!」と言える 学校づくりの推進

第2次美濃加茂市教育振興基本計画『FROM-0歳プラン2』のもと“自己にきびしく 人にやさしい 心身ともにたくましい子”を目指して、上記を方針としている。

その中で重点の1つである面による指導の一環で、子ども相談センターと連携し、児童虐待の理解と対応をテーマに具体的事例を通した研修を行った。また、県環境生活部と連携し、子どもを核とした地域づくりをキーワードにコミュニティ・スクールの設置に向けた学校の在り方や地域との連携の仕方に関わる研修を行った。

そして、全国共通研究課題を受け、教育環境整備をテーマとして、中学校区をもとに2つのグループで教頭としての働きかけを中心に実績を交流し、良さを学び合い、自校の向上につなげたり、教頭としての資質向上に努めたりした。

(東中学校 日比野 浩二)

郡上市教頭会

教職員の資質向上を図る教頭の役割

～「チームとしての学校」をつくる教頭のマネジメントを通して～

本市の課題について、「授業力向上（若手育成やICT活用）」「児童生徒への対応力（生徒指導や特別支援教育）」「学校運営参画意識（ミドルリーダーの育成と学校運営協議会の推進）」の3つに焦点を絞り、より効果的に教職員の資質向上を図るために、教頭としてどのような役割があるのかを探りたいと考え、本主題を設定した。

研究1年目の今年度は、まず、各自が自校の外部環境と内部環境の利点を整理したSWOT分析を行った。その結果明らかとなった学校課題を、上記3つのテーマに照らしてグループ編成し、実践交流を通して成果と課題を共有する場を設けた。各自の取組が、研究のための研究になるのではなく、自校の学校課題の解決に還元されるように配慮した。

研究2年目となる来年度は、実践内容をより焦点化し、効果的な手立てを明らかにする方向である。

(大中小学校 三浦 一之)

可児市教頭会

児童生徒の学校適応促進のための 体制づくりとマネジメントの在り方

児童生徒の学校不適応が増加傾向にあることを受け、学校ぐるみの対応を進めるため、各校での教頭の実践を交流・整理し、以下の4点に基づいた校内体制づくりを進めた。

- ①不適応の見立てと指導方針の共通理解
- ②組織的・継続的な対応
- ③職員の指導力向上
- ④校内全体のシステム化

この中で教頭として、早期に関係者と繋ぐ、他機関やSCなどの専門職と繋いだりする、ケース会で対応方針が出されるようアドバイスする、職員の指導力向上を図る、教育相談体制を強化した学校運営を具申するなどの働きかけを行った。教頭自ら対応のリーダーシップをとる場合とシステムとして対応する場合を両立し、適切な対応が持続可能となる体制ができつつある。

(広陵中学校 奥村 尚浩)

各郡市教頭会 研究報告 6

加茂郡教頭会

子どもが安心して過ごせる学校づくり・ 分かりやすい授業づくりを目指して

加茂郡では、サブテーマとして「魅力ある学校づくりに向けた教育環境の整備」として研究を進めた。具体的な視点は、以下の4つである。

- ①学校、家庭、地域との連携と協働に関わること
- ②教育の情報化に関すること
- ③児童生徒の安心安全に関わること
- ④学校の施設設備に関わること

各学校の取組としては、授業でのICTの活用、オンライン授業、学校の施設設備の充実、在宅型家庭教育学級などがあった。

成果は、教育と情報化の融合が増えてきたこと、コロナと共存する教育課程の見通しができてきたことなどがあった。

課題は、ICT活用の更なる工夫、保護者や地域の声の更なる反映などがあった。

子どもの安心を第一に考え、魅力ある学校づくりに向けた更なる教育環境の整備に取り組んでいきたい。
(坂祝中学校 小畑 清夫)

多治見市教頭会

組織マネジメントによる学校力向上の ための教頭の役割

今年度は上記のテーマの具現に向け「学校課題の把握」「働き方改革に向けた業務の効率化」の2点を重点項目とした。さらには喫緊の課題であるコロナ禍における学校運営という視点も踏まえて研究及び研修を推進した。

コロナウイルスが感染拡大する中で、教頭会長を中心にiPad研修を実施し、業務の効率化を図ることができるように試行錯誤しながら実践を行った。主として以下の3点に取り組んだ。

1つ目は、SWOT分析による学校課題の明確化と組織マネジメントの実践交流を行う。各学校での実践や学校課題に対して、自校に於いてどのような実践ができるのか、どう生かせるのかを意見交流をした。

2つ目は、「働き方改革」に向けた業務の効率化などの共通課題についても話し合い、多治見市の実践を他市にも広げられることができないか交流し合えた。

3つ目は、多治見市のGIGAスクール構想に向けて、「一人一台iPadへの対応」など、毎月の教頭会の午後からは教頭会長を講師として1～2時間の研修会を実施し、知識・技能を深めることができた。
(昭和小学校 鷺見 龍)

可児郡教頭会

家庭と地域、そして学校間で連携を図る学校運営 ～ICT活用で業務改善～

家庭と地域、そして学校間で連携を図る上で、意識や実態の調査は不可欠である。学校は、組織マネジメントを充実させ勤務のスリム化を進めてきたが、意識や実態を把握するための調査が減少したわけではない。そのため、調査を実施し集計・分析を効率よく進めることが課題であった。

昨年度にタブレットが導入され、意識や実態調査が容易にできるアプリを学校内外で共有できるようになった。

可児郡小中教頭会では、研修を重ね、アプリによる調査方法を学び、調査及び集計・分析作業ができるデータを共有し全小中学校が活用できるようにした。このことが業務改善につながった。

今後は、全ての調査でのデータ共有を目指し、更なる勤務のスリム化を推進する。

(向陽中学校 可児 美紀)

土岐市教頭会

「生きる力」の育成と今日的課題に応じる 教育を推進するための教頭の役割 ～学力向上に向けた授業改善における教頭の在り方～

土岐市小中学校教頭会は、本テーマの具現に向けて、各校で以下の4点を研究内容にして実践に取り組んできた。

- 1 「土岐市スタンダード授業」の確立に向けての職員指導と教頭の役割
- 2 9か年教育によるきめ細やかな指導を具現する職員指導と教頭の役割
- 3 効果的な学習環境 (ICT) を整える職員指導と教頭の役割
- 4 主体的な学びを生み出す「家庭学習の手引きの見直し」

各校の実践をもとに交流を行い、成果と課題について話し合った。交流の中では、各校の良さを取り入れる時に、自校の実態に応じた取捨選択のあり方と働き方改革を両立することについての教頭の役割について明らかにすることができた。

(駄知小学校 青木 茂)

各郡市教頭会 研究報告 7

瑞浪市教頭会

ICTで学校を変える ～ICTの活用の促進の図る教頭の役割～

1 主題設定の理由

今年度より、一人一台タブレットが導入されたことを受け、「ICTを活用した学校運営の在り方」を探るべく、テーマを設定した。

2 研究の歩み

テーマを「ICTで学校を変える～ICTの活用の促進の図る教頭の役割～」とし、学校課題の解消を目指すべく研究をすすめた。

3 研究内容と成果

(1) 実践交流の実施

実践交流(年8回)による、各校の情報共有

(2) 年2回の研修講話の実施

(東濃教育事務所指導主事)

ICT活用の今後の方向に関わる共通理解

4 今後の課題

- ・各校の進捗状況の交流の継続
- ・「いつ」「誰」が担当しても、円滑に活用できるためのシステムの構築
- ・ICT活用に付随する情報モラル指導の在り方の検討(瑞浪南中学校 中村 勝)

中津川市教頭会

自校の課題をふまえ、 教頭として力を入れて取り組んでいること

中津川市には、18の小学校と12の中学校があり、それぞれの学校規模や地域の特色を生かした教育を進めている。また学校によって抱えている課題にも違いがある。そこで本年度の研究テーマを見出しのように設定した。

9月から1月までの教頭会で実践交流の場を設け、毎月、主提案1名、グループ提案2名の提案を受けて、研修を進めてきた。主提案では、市内の校長会に指導者をお願いし、ご指導と講話をいただくようにした。グループ提案では、事前にテーマを知らせて希望を取り、グループを2つに分けて、交流を行った。

実践交流では、「働き方改革」「職員の育成」「職員集団の組織化」「危機管理」「PTA活動」「制服とLGBT」など、多様な内容で交流でき、有意義な研修となった。

(下野小学校 小海途 浩)

恵那市教頭会

豊かな人間性と創造性を育む学校をめざして ～組織の活性化と、教職員の指導力向上～

豊かな人間性と創造性を育む学校を目標とし、柔軟な発想で組織的な学校運営を推進することを目指し、本主題を設定した。

◆研究の歩み

6月 コミュニティ・スクールの役割

10月 岩村城址・城下町の見学

11月 児童相談所との連携、保護者対応の演習

12月 学校安全講習、児童養護施設との連携

1月 中山道大井宿・ひし屋資料館の見学

2. 3月 先輩教員から学ぶ・今年度の反省

◆成果と今後の課題

地域の教育力の活用、外部諸機関との連携について見識を深め、実践につなげることができた。

学校の小規模化・教職員の減少化の中、教職員の指導力や組織力向上のための方途、外部諸機関との連携等の在り方について、今後も研究・研修を進めていきたい。

(串原中学校 北村 昌弘)

高山市教頭会

挑戦し続けるたくましさの育成 ～ふるさとと協働する学校づくりを通して～

市内の全小中学校が、コミュニティ・スクール2年目となり、社会に開かれた教育課程(地域、まち協、家庭との協働)が求められている。また、第3期高山市教育振興基本計画の方針「郷土高山に根ざし、未来を切り開くための資質・能力を育む」を受け上記の研究テーマを設定した(2年目)。

研究は地域の特徴を生かし小中学校の連携を図るために、市内31校を中学校区や支所地域等を勘案して7ブロックに分け、幼保小中や学校運営協議会、まちづくり協議会との連携などブロックごとのサブテーマを設定し研究を進めた。

各自が自校で協働する学校づくりを推進し、児童・生徒のたくましさを高める研究を進めた。教頭会開催時には各校での地域や関係機関との連携について実践を交流した。

(岩滝小学校 大宮 次郎)

各郡市教頭会 研究報告 8

飛騨市教頭会

「志を語り合い しなやかに挑み続ける
飛騨びとを育む」教育を推進する教頭の役割
～地域の特性を活かしたふるさと教育の実践を通して～

飛騨市の進める飛騨市学園構想を受け、人やふるさとと深く関わりながら将来の担い手を育成することを目指す教育活動に取り組んでいる。各地域の特性を生かしたふるさと教育の推進に向け、教頭の果たす役割について研究を進め、実践交流を行った。成果と課題は以下のようなものである。

- ・地域と連携する際の ICT 活用は業務の軽減につながった。
- ・「ふるさと教育」の重点を共有する研修やワークショップ等の位置付けが職員の見通しにつながった。
- ・ふるさと教育のカリキュラムについて、学校の経営構想に基づいて見直しを進める。
- ・地域との連携を促進するために校内のニーズを把握する場を設定する。
- ・学校と地域の支援者との思いをつなぐ場と時間を設定する。

(神岡中学校 水野 暁子)

大野郡教頭会

心豊かで、たくましく、ひとりだちする子
～ふるさと白川郷に夢と誇りを～

- ①自分で考え行動できる姿（自立）
 - ②進んで他と関わり、自己を高める姿（共生）
 - ③他のために働く姿（貢献）
- ・資質向上研修を通して、総合的に教頭としての力量を身に付けた。
 - ・5つの管理の力量を高めた。（児童生徒・教育課程・職員・施設・文書の管理）
 - ・教育長・校長の講話、副校長の指導、村校長会等の情報を通して力量を高めた。
 - ・保学一貫教育による成果を具体的に発信できるように、保学の連携の橋となり、組織が連携して機能できるような態勢を整えた。
 - ・公表会へ向けて、全校研究会や各部研、各教科部の授業実践などを通して、職員の授業力及び資質向上を図った。

(白川郷学園 岸 貴彦)

下呂市教頭会

教育環境整備の推進
～授業改善と労務管理の視点から～

授業改善について、市内各学校における ICT を活用した 30 以上の実践事例を集約し、下呂市版の実践事例集を作成した。なかでも個別学習や協働学習についての具体的な実践は、各校で思考錯誤の段階であり、他校の実践事例は授業改善の一助になっている。

下呂市では、特に授業支援アプリ「メタモジ・クラスルーム」を活用した個別最適化の授業やオンライン会議による他校や外部指導者との交流で大きな工夫改善が見られた。

労務管理について、令和 4 年度から市内全中学校で年間を通した 16:30 下校を実施することとし、それに伴う諸課題の整理を進めてきた。

校長会、教務主任会、事務職員部会とも連携を図り、カリキュラムの工夫改善、通学バスの予算確保、校区の小学校や CS との連携等、16:30 下校の実現に向けた具体的な動きにつなげた。

なお、令和 3 年度の後期から 16:30 下校を先行実施している中学校では、前年度の同じ時期と比べ、全職員の平日の時間外勤務の平均がひと月当たり約 15 時間削減されている。

(萩原南中学校 中島 昌敏)